

〔書評〕

橋本四郎著

『橋本四郎論文集』 (国語学編・万葉集編)

橋本四郎氏が病魔に犯され、この世を去ったのは、一九八五年七月のことであった。その余りにも早い逝去に驚いたことが、昨日のことのように思い出される。

この論文集は、氏の業績が著書の形にまとめられていなかったとを惜しむ先輩・知友などによつて、遺稿が集められたものである。生前発表された諸論文の中から、三九編を選び、これを「国語学編」一九編、「万葉集編」二〇編に分けて収録してある。解説に断られているように、もとよりこの分け方は二分冊にするための便宜であつて、内容は必ずしも截然と分けられるものではない。従つて、読者はこの編成にとらわれる必要はないが、それなりに納得の行く類別が施されているから、ここでも、本書の編成に基づいて、内容を紹介しつつ、評言を加えて行きたい。

「国語学編」は、I〜IVの四部に分かれる。

第一部には、文字論、特に上代の万葉仮名に関わるもの三編を収める。①「ことば」と「字音仮名」、②「訓仮名をめぐつて」、③「多音節仮名」。

この三編に共通するのは、万葉仮名が単に一つ一つの音を表すも

のだという皮相な見方に対する批判である。

たとえば、①は、字音仮名について、これを単純に表音文字と決めることの危険性を、清濁表記を例として、論じたものである。表記は、意味の伝達を最終目標とする行為であるから、意味がはっきりしていれば、語形の構成に対する配慮が緩み、意味が不明の時は、一々の音を正確に押さえて行く意識が働く。従つて、たとえば助詞ゾに対して、清濁二形を認めることも、結果の当否はともかく、方法的には問題があるとす。助詞の占める従属的な位置からして、清濁書き分けの意識が緩みやすいからである。

また、②では訓仮名が、③では多音節仮名が取り上げられているが、仮名といえども、意味の伝達が目標である以上、何らかの表意性が負わされるのであり、そこに語としてのまとまり、文節としてのまとまりを示そうとする力が働いていることを明らかにしている。

表記研究は、音韻研究のための準備作業として行われることが多い。そういう場合、万葉仮名が一つ一つの音に直接に対応すると考えると、音韻研究にとつてまことに都合がよい。しかし、表記自体のもつ性格を考へるならば、そのような前提は、余りに単純なもの

山口佳紀

と言わざるを得ない。現在、音韻と文字とが一对一の関係で対応しているなどと考える研究者はいないだろう。しかし、実際の処理となると、音韻と文字とが直接に対応しているかのように扱ってしまうことが、決して少なくない。

ここで、評者の気づいた一例を挙げよう。

馬声^{ウマコエ}蜂音^{ハチノネ}石花^{イシハナ}蜘蛛^{クモ}荒鹿^{アラカ}（万葉二二・二九九一）

において、イブセクのブに相当する位置に「蜂音」とあるから、上代、蜂の音はブと言っており、語頭に濁音の立つ例であるというのが通説である。しかし、その論理で行くと、

天之香来山^{アメノカネヤマ}（万葉一・二八）

では、カグヤマのグに当たる位置に「来」の字があるから、「来」の意の語はグの形であったということになる。「蜂音」も、右の文字連続の中でイブセクのブに相当すると言うまでであって、単独でブと発音されたかどうかは分からない、と評者には思われる。

更には言えば、イブセシという形容詞は、上代ではイフセシと清音であったかも知れない。この語の仮名書き例は、他に、

移夫勢美等^{ウツセシメヒト}（万葉一八・四一三）

とあるのみであるが、この歌は平安時代に補修されたと言われている部分に属し、表記に色々問題のある長歌である。同源と思われるイブカシ（不審）・イブカル（訝）も、上代にはイフカシ・イフカルと清音であったと考えられるし、また同じく語源的に関係のありそうなオボツカナシも、オホツカナシと清音であったと思われる。従って、問題の語が上代からイブセシの形であったかどうか、実は確かでないのである。

橋本氏は、論文①の後記で、「万葉仮名による語形の清濁の復原に

対する可能性と信憑性が、どの程度期待できるかについて、年来疑問を抱いていた」と述べている。勿論、我々は、万葉仮名を資料として当時の音韻を考えるという作業をやめる訳には行かない。だとすれば、橋本氏の疑問を警告として受け止め、それをなすべく今後の研究に生かすということが、考えられなければなるまい。表記から音韻へという道は、氏の言う通り、決して楽観を許すものではない。

第II部には、文法史的な問題を扱った次の諸論が収められている。

④「動詞の終止形——辞書・注釈書を中心とする考察」、⑤「動詞の重複形」、⑥「動詞の未然形」、⑦「ク活用形容詞とシク活用形容詞」、⑧「上代の形容詞語尾ジについて」、⑨「ミの形をめぐる問題」、⑩「ク語法とその周辺」、⑪「かより合はば——接頭語と指示副詞と」、⑫「古語の指示体系——上代を中心に」、⑬「指示語の史的展開」。

④⑤⑥は、動詞の活用形のもつ形態と機能との関係を考えてたものである。

一活用形に属する幾つかの機能は、それぞれ独立的なもので、形の一致によつて、便宜上一まとめにされたに過ぎないという考え方が、それに対して、たとえば⑥は、未然形と呼ばれる形態が、一致して、未実現の動作を表現するもの、ある動作の実現につながる情態を表現するものであると論ずる。

各活用形の成立について論じた大野晋「万葉時代の音韻」（『万葉集大成・言語篇』所収）は、動詞終止形あるいは語根に、語頭にaをもつ接辞（アム・アニスアルなど）が接着した形があり、未然形というもの、そこから末尾にaを含む活用形として抽出されたに過ぎない

いと考えた。この考え方によれば、未然形の諸用法の間には、有機的なつながりがないことになる。そして、この論の影響力は、なかに大きかった。

そうした考え方に対して、未然形全体を貫く性格の存在を考えようとした橋本氏の論は、まさに一期を画するものであつたと言つてよい。橋本氏の論の特徴は、「活用体系」という本質的に共時論において扱うべき現象の一環」として活用形を捉え、その共通の形態に対して抱かれた一定の意識を問題にするという態度にある。この態度によつて、一活用形に備わる諸機能に共通する性格を考えることが可能になつた。

ただし、橋本氏は、それが本来その形態に備わつた機能と考えず、言わば後天的に獲得された性格であると思つてゐる。それは、たとえば上記の大野氏の所論に対して、「未然形の成立に関する通時的考察としては、頗る當を得たものと思われ」と評価している所にも表れている。

ただし、そのような見方であると、未然形として一括される諸形が「形の一致をまねいたのは偶然かも知れない」(一〇九頁)ということになる。しかし、形態の一致に意味を見出そうとするならば、ここに「偶然」を持ち出すのはいかにも惜しい。この論における橋本氏の立場は、むしろ成立論に関わらないというものであろう。だとすれば、未然形の成立については敢えて言及しないという方が、橋本氏の立場を一貫させることになつたのではあるまいか。

⑦⑧⑨は、形容詞に関わる論である。ここでも、形態と意味・機能との関係が鋭く追究されている。

たとえば⑧は、終止形語尾がシでなくて、ジとなつてゐる形容詞

(時ジ・我ジ・鴨ジ・同ジなど)を取り上げ、いずれも本来否定の意味をもつものであることを論じた。従来も個々には問題にされることがあつたが、橋本氏は、同一の語構成をもつものには共通する性格があるはずだとする立場から、一貫した説明を与えようとする。この論文に限つたことではないが、氏一流の周到な論の運びが、説得力を高めてゐる。

⑨は、形容詞のミ語法を対象として、その文法論的な位置づけを試みたものである。ミ語法に関しては、語源的な興味から論じたものが多いが、これは、上代における諸用法を構文論的に分析して、ミの形が動詞性と形容詞性とを併せもつことを明らかにしたものである。

⑨と問題設定において共通するのが、⑩のク語法を扱つた論である。橋本氏は、この論文で、上代には句を体言として一語化する総合的な構文のあり方が存在したことを指摘し、ク語法をその一環として捉え得ることを述べた。ク語法についても、かつて語源論的な研究が盛行した。その中であつて、いち早く構文論的な分析に着手したという点に、橋本氏の極めて鋭い問題意識を窺うことが出来る。

⑪⑫⑬は、指示詞に関する論である。その中心をなす⑫では、上代における指示詞の体系が、感覚の世界を指示するコと、観念の世界を指示するソとの二元的対立を基本とする構造を有していたことを論じてゐる。

上代における遠称の未発達は、しばしば指摘されていた。しかし、遠称が欠けていたとすれば、そういう言語において、指示詞がどのような構造を有していたことになるのかという点まで追究する論はなかつた。すなわち、上代には遠称の用例が少ないから、未発達だ

つたのだろうという程度の認識であった。指示詞の歴史は、橋本氏によつて初めて学問的に定位されたと言つても、決して過言ではない。

第三部には、中世から近世にかけての文法史的問題を扱つた諸論が収められている。⑭「行く」の音便」、⑮「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」、⑯「ベシ・マジの接続面の混乱」、⑰「『あらない』はあらない」。

このうち、⑮を取り上げるならば、これは、中世に四段動詞連用形の音便化が法則的になつて行く中にある、サ行四段のイ音便だけが逆行して行くことについて、その理由を究明した論である。橋本氏は、この現象について、笑ハセ—笑ハシのように、サ行動詞の語尾がセとシとの間で揺れていた点に、最大の原因を求めた。

ただ、この論文の趣旨を右のように要約することによつて、原文の豊かな内容から余りにも多くの部分が脱落することを認めない訳には行かない。この論文だけのことではないのだが、橋本氏が対象に立ち向かう場合、その観察は甚だ詳細であり、その論理は極めて緻密である。そして、それは対象のもつ複雑さをそのままに掬い取ろうとすることに外ならない。従つて、我々読者は、その慎重で的確な処理をこそ学ばなければならぬ。

第四部は、近世文語に関する二編の論文から成る。⑱「里見八犬伝の文体とその文語——文語史研究の基礎として——」、⑲「近世における文語の位置」。

橋本氏は、「最後に到達すべき目標が、近世の文語の実態を明らかにすることであり、そこを土台として通時態における文語の把握で

あるとすれば、各種の資料に見えるあらゆる現象を正確に記述することから、始められなければならない」（372頁）と述べている。当然の手續と言ふべきであろう。そして、里見八犬伝や黒本・男色狐敵討における文語のありようを浮き彫りにする記述は、例によつて、まことに詳細である。しかし、文語史というものがどのようにして成立し得るかが必ずしも明確になつていない現段階において、どのような実態を明らかにすべきかが、実は問題なのである。橋本氏の抱懐する文語史研究の構想がどのようなものであつたか、それを知る機会は永久に失われてしまった。

「万葉集編」も、四部に分かれている。

第一部は、万葉集の歌の幾つかについて、その作品的性格を論じたものから成る。①「暫間歌人佐伯赤麻呂と娘子の歌」、②「竹取翁歌の構成とその性格——二、三の訓詁にふれて——」、③「はばき」、④「竹取翁歌とところどころ」、⑤「大伴書持追和の梅花歌」。

これらは、文献学的・訓詁学的な手続を経て、その作品の文学性を解明するに至つたものである。この第一部は、難解をもつて知られる竹取翁歌に関する論考②③④が中心をなすが、それらの内容の紹介にはかなりの紙面を要するから、便宜①を取り上げることにする。

①では、佐伯赤麻呂の歌が問題にされる。赤麻呂の歌は、万葉集に三首あるが、そのうちの二首は、「娘子」の歌と贈答歌の関係にある。橋本氏は、そのいずれもが、「娘子」から赤麻呂に「報」ずる歌で始まつている点に注目する。そして、題詞に「答」「和」でなく、「報」と表現されているのはなぜか、また固有名を出さずに単に「娘子」と呼ばれるのは一般にどういふ場合かを追究した結果、両歌群は、

虚構の物語を歌にして宴席の座興に供したもので、赤麻呂は道化役を引き受ける暫間的歌人であつたと推定するに至るのである。

着実で犀利な論の運びは、ここでも極めて説得的である。勿論、疑問の個所がないではない。たとえば「娘子報佐伯宿禰赤麻呂贈歌一首」の題詞をもつ四〇四番の歌についてである。橋本氏は、「赤麻呂からの働きかけを受けて生まれた歌であることは『報』の字からわかるものの、その働きかけが歌の形をとつていたことを示す徴証は見出すことができない」と述べている。これは、「報」は歌の先行が必須条件ではないという橋本氏の考え方から出て来る意見である。

ところで、橋本氏は、右の題詞を「娘子、佐伯宿禰赤麻呂に報へて贈る歌一首」と読む説に従つた。しかし、「娘子、佐伯宿禰赤麻呂の贈るに報ふる歌一首」と読む説によるならば、赤麻呂の贈歌はやはりあつたことになる。そして、後者の読み方が、原文の措辞から見て、穩当なのではあるまいか。

そうした疑問はあるにしても、この論文は、万葉集の贈答歌とされるものがどんな性格をもつかを、改めて考え直させた点に大きな意味をもつ。

第II部は、万葉集における難解歌の解釈を試みたものである。⑥「くまこそしつと忘れせなふも」、⑦「許氏多受久母可」、⑧「恋はかなし」、⑨「朝月日向黄楊櫛」、⑩「衾道を引手の山」、⑪「卷十六『饌具雜器』をめぐつて」。

一例として、⑨を取り上げてみる。

朝月日向黄楊櫛古りぬれど何しか君が見れど飽かざらむ（万葉

一一・二五〇〇）

という歌がある。従来、第一・二句は「朝づく日向かふ黄楊櫛」と訓まれていた。ただ、この訓み方については、「朝づく日」がなぜ「向かふ」に係るのか、「向かふ」と「黄楊櫛」との関係はどんなものなのか疑問とされてきた。しかし、橋本氏は、それ以上に、「朝づく日」という表現が何を意味するかを問題にする。

「秋づく」「夕づく」の「…づく」は、「次第にその時間に近づいて来る」の意である。もし「朝づく日」という言い方があつたとすれば、「あたりが朝らしくなってくる時分の太陽」という意味になるが、その太陽はまだ地平線の下にあるはずである。「朝づく日」は「朝日」と同じではなく、それに対応すべき外界の対象を持たないと、橋本氏は指摘する。

そこで、氏は、童蒙抄に「宗師案」として紹介する「朝月の日向黄楊櫛」と訓む説を採用する。朝の月は日と向かい合う故に「朝月の」は「日向」に係り、「日向黄楊櫛」は日向の国の特産として黄楊製の櫛があつたのだからというのである。まことに理路整然、この難解歌の解釈は、本論によつて解決を見たと言つてよい。

右の諸論のうち、⑪の論は、橋本氏の最初の論文で、旧制大学在学中に執筆されたものという。そのことも考え合わせて、橋本氏は、この第II部に収められたような論に最も愛着を抱いていたのではないかと、ひそかに想像する。ここに展開された諸論は、殆ど異見を差しはさむ余地のないほどの完成度を示している。

第III部の諸論は、万葉集を中心とする上代文献に現れる語詞について、意味や使い方を考証したものである。⑫「つつむ」、⑬「きふ」と「きはる」、⑭「うまし」、⑮「あをうま」と「あしげうま」、

⑩「ねりのむら」と、⑪「八多籠」。

たとえば、⑫を紹介すると、ツツムという行為は、呪力をひめたものに対して、その力のいたずらな発散を抑制し、正しい場でそれを発動させようという発想に支えられていたこと、ツトはツツムという動詞と関係があつて、みやげという目的に基づく名称ではなくて、包まれた形という可視的形状に基づく名称であること、また、水辺の収穫物を贈る時には包装材料としてタマモがよく用いられたことなどが指摘されている。

単語のもつニュアンス、その単語の用法を支える上代人の発想のあり方、さらにその単語を含む歌の捉え方と進む手際はまことに鮮やかで、この種の論の模範とすべきものと言える。

ところで、ツツムとツトとが語源的に関係するとするのは正しいであろうが、それらはまたツツ（伝）・ツタフ（伝）・タタム・タタヌ・タタナツクなどと母音交替的に関連するという考え方になると、必ずしも従えない。ただし、それは、この論全体から見れば、さほど大きなことではない。

この部に収められた諸論は、小品が多いが、鋭い着想と着実な考証とによって、それぞれに論文を読む楽しみを与えてくれる。

第IV部には、古代語あるいは万葉語の性格を概観した長編三本を収める。⑬「古代の言語生活」、⑭「万葉集の語彙」、⑮「万葉集のことば——親族語彙・人名・地名など——」。

第II・III部では、微視的な問題を論じて手腕を発揮した橋本氏が、この第IV部では、古代語全体に対する巨視的な見通しを述べて、視野の広さと展望の確かさを印象づける。たとえば、⑯では、親族語

彙・人名・地名などの現れ方を検討して、万葉集の歌を支える場の狭さ、閉鎖性を指摘し、日常言語の場と歌の場との隔りは、平安時代に比して遥かに小さかったと推定する。万葉語の性格を考えるに当たって、必ず顧みられるべき論である。

以上、「国語学編」「万葉集編」の二冊にわたって、内容を紹介し、若干の感想を述べた。

評者が橋本氏の論文に初めて触れたのは、「ク活用形容詞とシク活用形容詞」を読んだ時のことであつた。評者はその周到な考察に感銘を受け、以来既発表の論文を出来るだけ多く探し出して読むようにし、新発表の論文は必ず目を通すように心掛けた。従つて、この両冊に収められた諸論は、既に一度は読んだものばかりである。

しかしながら、この機会にそれらを改めて一読、再読してみても、そこに実に多くのことが書かれていることを今更に感じ、驚いている。また、発表年月がかなり以前のものであつても、内容的に古びていないことは、驚嘆に値する。橋本氏が生きておられたら、さらに多くの論考を生み出して、我々を裨益したであろう。その可能性が永久に失われたことは、惜しんでも余りあると言わなければならぬ。しかし、この二冊に含まれた内容は、極めて豊富である。そこから出来る限り多くのものを引き出して、その展開をはかるのが、残された者の務めではないだろうか。

（昭和六十一年十二月十日発行 角川書店刊 A5判 国語学編 三八六頁 万葉集編三〇二頁 全二冊一三〇〇〇円）

——聖心女子大学教授——

（平成元年十二月十二日 受理）